

令和8年度 自ら学び 自ら考え 自ら行動する子を育てる



松林小だより

5月

令和8年4月30日

第2号

茅ヶ崎市立松林小学校 校長 下反 達二

種まき

1年生の給食がはじまり、学校はますます活気づいてきました。桜はすっかり散ってしまいましたが、春の陽気と緑かおる風が、気持ち良い今日この頃です。新しい学年・クラスがスタートして一ヶ月。進級や入学の緊張感が少しずつ和らぎ、子どもたちの表情には、学校生活に慣れてきたことによる安心感と、元気ある笑顔が見られるようになってきました。

さて、5月は植物にとって大切な「種まき」の時期です。学校生活においても、この一ヶ月は、これから一年間かけて大きく育てていく「学び」や「心」の種をまく、極めて重要な期間であると考えています。

私が大切にしたいのは、子どもたちが自らの手で種をまく「自分から(主体性)」という姿勢です。誰かに言われてまく種よりも、「これを育ててみたい」「こうなりたい」と自ら願い、心を込めてまいた種こそが、困難に直面しても折れない強い根を張るからです。

授業の中で、自ら問いを見つけ解決しようとする姿。「なんで? どうして?」「こうしたら、うまくいくかも」

休み時間に、新しい遊びを自分たちで工夫して作り出す姿。「階段のここから先は海ってことで」

行事に向けて、仲間と協力しながら自分たちの役割を果たそうとする姿。「みんなでやれば、絶対間に合うよ」

こういった生活の中での行動が、未来の自分を作るための大切な種まきです。私たち教職員は、その種が芽を出しやすいよう土壌を整え、時には「励まし」という名の水をやりながら、子どもたちの自立を支えてまいります。

種をまいてから芽が出るまでの時間は、一人ひとり異なります。すぐに芽が出なくても、土の中では着実に根が伸び、準備が進んでいるものです。『種から最初に出るのは「芽」ではなく「根」だ』——こう語ったのは、「奇跡のリング」で知られる木村秋則氏です。自然栽培の稲は、見た目には慣行農法の稲より育ちが遅く、弱々しく見えることがあるそうです。ところが実際には、土の中で根がしっかり伸びていて、ある時期を過ぎると一気に成長し、追い抜いていくといいます。木村氏はこう語ります。『最初は成長が悪いように見えた自然栽培の稲も、根を先に伸ばしているから、時期が来るとどんどん伸びる。根をまず育てる——それは、リングにも、人間にも当てはまることだと思います。』(「土の学校」木村秋則著より)結果を急がず、それぞれのペースで進む「(見えにくいかもしれない)成長のプロセス」を、ご家庭でも温かく見守っていただければ幸いです。

今月も、子どもたちがたくさんの「素敵な種」を自分たちの手でまけるよう、教職員みんなで、子どもたちを支えてまいります。引き続き、本校の教育へのご理解とご協力をお願い申し上げます。



授業参観・懇談会にご参加くださりありがとうございました。

保護者の皆様には、お忙しい中、授業参観・懇談会に多数ご参加くださり、ありがとうございました。皆様におかれましては、保護者様同士で交流を深めていただくとともに、担任、我々職員とのチームワークを深めていただき、わが子だけでなく、わが子に加えて、松林小全ての子どもたちの成長のために、ぜひ力をお貸しいただきたいと強く願っております。

地域の皆様も引き続き、どうぞよろしく願いいたします。